
ベアが見てきた物語

すずらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベアが見てきた物語

【Nコード】

N3970B

【作者名】

すずらん

【あらすじ】

イギリスで生まれたテイベアが人々の手を渡り、ある少年と少女の恋を見守るお話し。クマのぬいぐるみの視点から語られるラブストーリー。

第一章 ヴェルナとベア

わたしは数ヶ月前、ヴェルナさんに生み出されました。ヴェルナさんは何日も何日もかけてわたしを丁寧に作り上げてくれました。

わたしの毛並みは他の仲間とは少し色が違っていています。これはヴェルナさんが特別に調達した、他ではなかなか手に入らないような毛布を使ってくれたからです。ヴェルナさんは素材にこだわる方でした。わたしの体を縫い合わせる糸や眼も、最高のものを使ってくれました。

わたしが完成した時ヴェルナさんはぎゅっと、わたしを抱きしめて、キスしてくれました。わたしにはヴェルナさんの愛情と、綿がたっぷり詰まっています。

しかし、別れは突然やってきました。

わたしを作り上げたヴェルナさんはわたしを仲間たちと一緒に戸棚の上に飾りました。そこからは、ヴェルナさんが仕事をするのがよく見えました。ヴェルナさんは、今度はわたしの隣にいるような毛色の、新しい仲間を作っていました。わたしと同じ毛色は、わたし以外にはいませんでした。

いつものように仲間たちとヴェルナさんの仕事を見ていたときのことでした。

男の人が仕事場にやってきてヴェルナさんに話しかけました。ヴェルナさんと男の人はしばらく話をした後、男の人が持っていた袋の中にわたしの仲間たちを次々と入れ始めたのです。その手はどんどんわたしへ迫ってきました。そしてとうとう、男の人の手がわたしを掴もうとしました。すると、ヴェルナさんがわたしに声をかけました。

「わたしのかわいい子どもたち。どうかいい人の元でいい子たちと友達になってね。そして幸せや愛をその子たちに……」

わたしたちは、もう二度とヴェルナさんには会えないと悟りました。

袋に入れられてどれくらいの時間たったのでしょうか。袋から出されたとき、初めて見る景色が広がっていました。ヴェルナさんが使っていた、仕事用の机やはさみ、針箱の姿はありません。もちろんヴェルナさんどこにもいません。いるのはわたしたちを袋に入れた男の人と若い女の人だけでした。

男の人と女の人わたしたちを窓辺の棚に並べ始めました。そして、わたしたちの体に、何かが書かれている札をそれぞれ付けました。わたしの札は、他の仲間たちとは少し違っているようでした。わたしはこの部屋の中に、わたしたち以外にも、札を付けられて壁の棚に飾られている方たちがいることに気が付きました。

見た目はわたしたちとまるつきり異なっている方や、耳などの一部分だけ異なっているような方など様々でした。しかし、わたしが彼らを見たのは札を取り付けられるときだけで、それ以来ずっと窓の外しか見ることができませんでした。

窓の外には人がたくさんいました。男の人、女の人、若い人、お年寄りの人、子ども。さらには、わたしたちのように毛で覆われているのに、四つの足を使って自由に動ける犬や猫という動物が通りかかることもしばしばありました。彼らはわたしたちに見向きもせず、いつもすぐに通り返してしまします。でも、子どもや女の人、お年寄りの人たちは、よくわたしたちを見て微笑んでくれます。

ここに来て数日が経った日のことです。

一人の子どもが、母親らしき人の手を引いてやってきました。しばらくして仲間の一人が、さっきの子どもに抱きしめられながら窓の外を通り過ぎていきました。

このようなことが何度もありました。特にそれは、人々の衣服が厚くなり、木の葉がすべて落ちきって、白いものがふわふわと空か

ら降り出す頃にたくさんありました。しかし、わたしの仲間たちはどんどん外へ連れ出されるのに、わたしはなかなかこの場所を動くことがありませんでした。手に取られることは何度かありました。でも皆わたしに付いている札を見て、また元の場所に戻されるのでした。

わたしの仲間たちがほとんど外へ出て行った頃、あの男の人があの時と同じ袋を持ってやってきました。そして、わたしたちがここに来た時と同じことを、袋の中の方たちにして、わたしの横に並べられました。

人々の服が少し薄くなり、木の葉が青々としてきて、空からの白い贈り物が現れなくなった頃、やはりわたしの横にいた方たちばかりいなくなつて、わたしはまだそこにいました。

みんな今頃どうしているのでしょうか？ ヴェルナさんは元気でいるのでしょうか？ この窓の外の世界はどんな風なんでしょうか？ わたしはヴェルナさんに言われたように幸せや愛を捧げることができるのでしょうか？

こんなことを思っていたときのことでした。珍しく男の人がわたしを見て微笑みました。そしてその男の人は、奥さんらしき女の人と共に中へやってきて、わたしを抱き上げました。

女の方はわたしの札を見て「他のにしましょう」と言いました。

わたしはまた元の場所に戻されるのだらうと思いました。しかし、男の人はわたしを離しません。奥さんとしばらく話し合った結果、わたしはこの男の人によって初めて外の世界に出ることになったのでした。

第二章 リヨウとベア

若い夫婦によって外に出たわたしは、車という乗物に乘せられて、一軒の家に着きました。

家の中に入るなり、夫婦はある部屋へ一目散に入りました。その部屋には優しそうなおばあさんと、小さな男の子がいました。

奥さんがその男の子を抱き上げて、優しくキスをしました。そして、旦那さんがわたしをその男の子の前に出して、わたしの手を動かしながら高い声を出しました。「こんにちは、リヨウ君。僕と仲良くしてね」

男の子は、わたしのことをしばらくじっと見つめて、お母さんの方を見ました。

「デディベアっていうのよ」

「べ、あ？ ベア！ ベア！」

このリヨウ君という子は、それからずっとわたしのことをベアと呼ぶようになりました。

リヨウ君は、眠る時も、ご飯を食べる時も、お出かけをするときもわたしを離しませんでした。それに、とっても大切にしてくれました。よだれがわたしに付かないように気をつけたり、食べこぼしでわたしを汚さないように、わたしにもよだれかけをかけてくれました。

わたしがリヨウ君と暮らし始めて数週間が経ったときのことです。わたしはリヨウ君に助けられました。

奥さんが換気のために、家中の窓を開けていました。すると、奥さんの目を盗んで野良犬が入り込んできたのです。犬は、床にいたわたしをくわえると、そのまま逃げようしました。そのときです。いつもは大人しいリヨウ君が大声を上げて、手をグーにして犬に向かって走ってきたのです。犬は驚いてわたしを落とすと、慌てて外

へ逃げていきました。

その騒ぎに気付いて、奥さんが駆けつけてきました。奥さんは犬の足跡を見てびっくりしていました。リヨウ君はわたしがケガをしていないか、心配してあちこちをやさしく撫でてくれました。

リヨウ君はとてもやさしい男の子です。ですが、あまり外では遊ばず、ほとんど家の中にいます。そういえば、リヨウ君や奥さんや旦那さんの言葉は、ヴェルナさんや他の人は違っているようです。髪や眼などの感じも少し異なっているようです。

リヨウ君が4歳のときでした。

急にリヨウ君の家族は荷物をまとめ始めました。わたしも箱に入られそうになりましたが、リヨウ君が嫌がったので、わたしは箱には入れられませんでした。

家の中の物がどんどん運び出され、がらんとしていました。わたしはリヨウ君にしっかりと抱かれて、旦那さんや奥さんと一緒に、飛行機と呼ばれる空飛ぶ船に乗りました。リヨウ君が窓の景色を見せてくれました。見えるのは白い雲と青い空ばかりでした。これからどこへ行くのでしょうか？

第三章 リヨウと美奈恵とベア

何時間も飛行機という乗物に乗っていて、リヨウ君はすっかり飽きてしまっているようでした。飛行機はようやく地に足を下ろしました。そこは、日本という国でした。

日本にやってきたばかりのリヨウ君は、環境の変化に驚き、わたしやお母さんにぴったりと付いて離れませんでした。新しい家に行ってもリヨウ君はわたしとお母さんの手を、しっかりと握り続けていました。リヨウ君のお父さんとお母さんは、ご近所に挨拶に行くことになりました。リヨウ君は後ろに隠れるようにして付いていきました。もちろんわたしも一緒です。

右隣の家には、やさしそうな老夫婦が住んでいました。老夫婦のおばあさんが、リヨウ君に声をかけましたが、リヨウ君はお母さんの後ろに隠れてしまいました。

次に左隣の家に挨拶に行きました。そこでは奥さんが一人出てきました。旦那さんは仕事で、息子さんは一人立ちして、都会に住んでいるそうです。リヨウ君はずっと影に隠れたままだったので、その奥さんはリヨウ君に気が付きませんでした。

最後にお向かいにある家に行きました。その家には、若い夫婦がいました。リヨウ君のお父さんとお母さんと、その若夫婦はすぐに打ち解けたようでした。

「まあ、イギリスからいらしたの」

「ええ。わたしの仕事の都合で……」

「子どもが生まれる前にイギリスへ行ったのですが、また戻ってくるようになりました。また、いつイギリスへ戻るのか分かりませんが、これからよろしくお願いします」

このような大人の会話を聞いて飽きてきたリヨウ君が、ふと後ろを振り向くと、リヨウ君と同一年ぐらいの女の子がいました。

「わあっ！」

リヨウ君は思わず声を出して驚きました。

女の子はリヨウ君のことをじろじろと見つめています。

「なに？」

「ねえ、名前はなんていうの？ あたし美奈恵」

「ぼ、僕はリヨウ……」

そう、リヨウ君が答えると、美奈恵ちゃんは「リヨウ君、一緒に遊ぼう！」と、リヨウ君の手を引っ張ってお母さんたちの間を通り抜けていきました。

この日から、美奈恵ちゃんはリヨウ君の初めてのお友達になったのでした。

幼稚園に行く時や、幼稚園から帰ってくる時も二人は一緒でした。幼稚園から帰ってくると、二人はリヨウ君の家か美奈恵ちゃんの家や近くで遊びました。幼稚園がお休みの日も二人はよく遊びました。美奈恵ちゃんというお友達ができてから、リヨウ君はすっかり明るくなりました。前は、ずっと家の中にいたのに、今では外にいる時の方が好きなのです。それによく笑うようになりました。

でも、前まではわたしのことをひと時も離さなかったのに、今ではよくわたしは家の中で一人、お留守番をしています。ちよと寂しいかなと思いますけど、リヨウ君が元気でいてくれる方がわたしは嬉しいのです。それにリヨウ君は時々わたしに話しかけてくれますし、美奈恵ちゃんはリヨウ君の家に来ると、いつも私を抱っこしたりして可愛がってくれます。

こんな日々が二年続き、四月からリヨウ君と美奈恵ちゃんが小学校に入ることを喜んでいた、ある日のことでした。

わたしにまたお別れの日がやってきたのでした。

この日、リヨウ君たちが夕食を食べていると、電話が鳴りました。お母さんが電話に出ましたが、すぐにお父さんが代わりました。電話が終わると、お父さんはリヨウ君とお母さんに言いました。

「イギリスの会社からだった。また、向こうで仕事をする事にな

った」

「まあ。じゃあ、リヨウは向こうの小学校に行くことになるわね……」

「僕、美奈恵ちゃんと一緒に学校に行けないの？」

リヨウ君のお父さんとお母さんは、リヨウ君を説得するかのよう
に話をしました。そして、リヨウ君はそれを受け入れたのでした。

またあの時のように、家の中はガランとしていました。そしてわ
たしは、今度もリヨウ君にすっかり抱かれていました。一つ前とは
違うのは、美奈恵ちゃんがずっとリヨウ君の服を掴んでいたこと
です。美奈恵ちゃんはリヨウ君とお別れするのが嫌だったのです。

「美奈恵ちゃん、僕、一緒に学校に行けなくなっちゃったんだ。ご
めんね」

「いや！ あたし、リヨウ君と一緒に学校に行きたい！」

美奈恵ちゃんは、力強くリヨウ君の服を掴みながら泣き出してし
まいました。美奈恵ちゃんがこんなに駄々をこねるのは、初めての
ことでした。

美奈恵ちゃんのお母さんが、美奈恵ちゃんをリヨウ君から離そう
としても、美奈恵ちゃんは決して手を離しませんでした。

お母さんたちが困っていると、リヨウ君がわたしを美奈恵ちゃん
の手に渡しました。

「美奈恵ちゃん、これ。ベアはね、いつも僕のことを見てきてくれ
たんだよ。美奈恵ちゃんと友達になる前までは、ベアだけが僕の友
達だったんだ。僕の大切なベアを僕だと思って持っていてよ」

「でも、リヨウ君の大切なものだもん。もらえないよ」

「ううん。あげるんじゃないよ。美奈恵ちゃんに預かっていてもら
いたんだ。僕の大切なベアを預かっていてね。いつかベアを返して
もらいに、必ず帰ってくるよ。約束するよ」

リヨウ君と美奈恵ちゃんは、小指を出して指きりをしました。

美奈恵ちゃんの手は、もう、リヨウ君の服を掴んでいません。し
っかりと、わたしを抱きしめていました。

第四章 美奈恵とベア

美奈恵ちゃんの家では、一本の桜の木が、花を降らせていました。とても暖かい日差しがわたしを照らします。

今日は、美奈恵ちゃんの小学校の入学式の日です。ちょっとおめかしをした美奈恵ちゃんはお父さんとお母さんに連れられて、家を出ようとした美奈恵ちゃんは、急にわたしの元へ戻ってきました。

「パパ、ベアも連れて行こう！」わたしも美奈恵ちゃんの入学式に行けるのですか！？　なんと嬉しいことでしょうか。絶対にお留守番だろうと思っていましたのに。

わたしは、美奈恵ちゃんとお父さんとお母さんと一緒に小学校へ行きました。そして、小学校の前で写真を撮りました。おめかしした美奈恵ちゃんと、ピカピカのランドセル。美奈恵ちゃんの腕に抱かれていたわたしは、それが初めての写真でした。

美奈恵ちゃんは、小学校での生活がとても楽しいようで、毎日の学校での出来事をわたしに教えてくれました。遠足に行ったときは、わたしにお土産をもってきてくれました。運動会ときにはかけっこで一位になったメダルをわたしにかけてくれました。お友達が遊びにきたときにはわたしも一緒に遊ばせてもらいました。

そんな日々が早くも六年が経ち、小学校の卒業式がやってきました。すっかり大きくなった美奈恵ちゃんは、卒業式の日、わたしも小学校へ連れて行ってくれました。そして、入学式と同じように、わたしを抱いて写真を撮ったのでした。

一カ月後、今度は中学校の入学式がやってきました。今度も、わたしは連れて行ってもらいました。そして、美奈恵ちゃんと一緒に中学校の前で写真を撮りました。これはもう、恒例の行事となりました。これからも、入学式と卒業式にはわたしと一緒に写真を撮る

のだと、美奈恵ちゃんは決めていました。きっと、わたしをリヨウ君と重ねているのでしょう。一緒に学校へ行きたかった気持ちを、この写真たちには込められていることでしょう。

中学生になった美奈恵ちゃんは、部活動で帰りが遅くなることが多くなりました。疲れているのでしょうか、時々、わたしに学校の出来事を話している途中で寝てしまうことが増えてきました。美奈恵ちゃん、大丈夫でしょうか？ 無理はしないでくださいね。

三年生になった美奈恵ちゃんは、二学期から部活動を引退しました。今までよくがんばりましたね。でも、今度はお勉強が大変になってきました。高校生になるために、美奈恵ちゃんは毎日夜までお勉強です。わたしは部屋の反対側から、机に向かう美奈恵ちゃんの後姿を、ただ見つめるだけでした。それでも、たまに息抜きでわたしに話しかけてくれました。

「わたしね、どうしても行きたい高校があるの。その学校で英語をたくさん勉強して、それから……れか……」

美奈恵ちゃんは眠ってしまいました。わたしを抱いたまま眠ってしまいました。美奈恵ちゃん、お勉強がんばってね。でも、夢の中ではゆっくり休んでいいのよ。

美奈恵ちゃんは、見事、希望の高校に入ることができました。合格発表では一番にわたしに報告してくれました。中学校の卒業式と高校の入学式では、もちろん一緒に写真も撮りました。

高校生活も、なかなか大変そうです。部活や勉強で忙しいのは以前からですが、美奈恵ちゃんが急に泣き出すことがありました。そんなとき、美奈恵ちゃんはわたしを抱きしめます。

泣かないで、美奈恵ちゃん。泣いていたら可愛い顔が台無しよ。大丈夫よ。美奈恵ちゃんならきっと大丈夫。辛くて苦しいことは誰にも訪れること。乗り越えたとき、人は大きくなれるのよ。

美奈恵ちゃんは、乗り越えられたようです。今度は大学受験のため、美奈恵ちゃん、一生懸命、勉強をしています。ですが、美奈恵ちゃんの行きた

い大学について、お父さんとお母さんは反対をしているようです。なんと、美奈恵ちゃんはイギリスの大学へ行きたいと思っています。理由は、きつとりヨウ君に会うためなのでしょう。お父さんもお母さんも、猛反対です。美奈恵ちゃんのご両親と話し合いをしました。わたしにその話し合いは聞こえてきませんでした。が、どうやら美奈恵ちゃんはイギリスの大学をあきらめたようです。

それでも、美奈恵ちゃんは決して挫けません。美奈恵ちゃんはとても意思が強く、とても前向きな女の子ですもの。その証拠に、高校の卒業式の写真に写る美奈恵ちゃんは、とてもしっかりと前を見つめていました。

美奈恵ちゃんは地元の大学へ入学しました。でも、イギリスをあきらめたわけではありません。美奈恵ちゃんは、その大学の短期留学でイギリスを目指そうと思ったのです。

二年生になった美奈恵ちゃん、たった三ヶ月だけですが、イギリスへの留学が決まりました。もちろん、ご両親も承知しています。

さあ、イギリスへ出発です。美奈恵ちゃんと一緒に、わたしもイギリスへ行きました。まず、美奈恵ちゃんは留学先の大学でリヨウ君を捜しました。でも、リヨウ君はいませんでした。他の大学も調べました。休日は街に出て捜しました。それでも、リヨウ君は見つかりませんでした。

もうすぐ三ヶ月。日本へ帰らなくてはなりません。美奈恵ちゃんからは元気がなくなっていくようでした。イギリスにいられる最後の日、美奈恵ちゃんはわたしに話しかけてきました。

「ねえ、ベア。やっぱ無理なのかな？ イギリスに来ればリヨウ君を見つけれられるなんて、考えが甘かったよね」

美奈恵ちゃんは、初めてあきらめてしまいました。だめよ、美奈恵ちゃん。あきらめないで。

「何も知らない外国で、一人の女の子が一人の男の子を見つけない

んて奇跡なんだね。わたしとリョウ君が小さい時に出会えたのって、それも奇跡だったのかもしれないわね。もしかしたら、幻だったのかもしれない……」

幻なんかじゃないわ。だから、今ここにわたしがいるのよ。お願い泣かないで、美奈恵ちゃん。

「もしも、またリョウ君に会えても、リョウ君がわたしのことを忘れていたら？　わたししか覚えていなかったら？　もう、十五年も昔のこと、覚えていてくれないわよね……」

そんなこと言わないで。リョウ君は絶対に美奈恵ちゃんのことを覚えています。美奈恵ちゃんとの約束も、わたしのことも忘れていませんよ。美奈恵ちゃんが信じないで、他に誰が信じるのですか？　リョウ君はあの時、きちんと言いました。泣きたいのに涙をこらえて、あの時約束しました。必ず帰ってくるよと。

待ちましょう。日本でリョウ君の帰りを待ちましょう、美奈恵ちゃん。

第五章 愛と幸せとベア

美奈恵ちゃんは、大学を卒業すると、働くために都会で一人暮らしを始めました。一人暮らしといっても、わたしもいますけどね。美奈恵ちゃんはリヨウ君のことをあきらめてはいませんよ。それは、美奈恵ちゃんが今でもわたしを大切にしてくれているのが証拠です。まだ、美奈恵ちゃんはリヨウ君と再会できることを信じています。もちろん、わたしもリヨウ君が来てくれることを信じています。

都会に住み始めてから数年が経ち、美奈恵ちゃんは二十六歳になりました。今日は、美奈恵ちゃんのお友達が、美奈恵ちゃんの誕生日をお祝いするために集まっています。

「美奈恵さん、恋人とかはいないの？」

一人の男の人が聞きました。

「だめだめ。美奈恵ったら、大昔の初恋の相手が忘れられなくて、今まで付き合ったことがないのよ」

美奈恵ちゃんではなく、女の人が答えました。

「あのディベアが、また会おうっていう約束なんだって。二十年も昔のことなんでしょう？ もう、相手は忘れちゃっているわよ」

今度は別の女の人が、わたしを見ながら言いました。

「会うまでは、約束を忘れていたって証拠でしょ」
「それは約束を覚えていたって証拠でしょ」

美奈恵ちゃんのリヨウ君への想いは、きっとリヨウ君にも届いているでしょう。

人は、このようなことを奇跡と呼ぶのでしょうか。

奇跡は突然やってきました。

美奈恵ちゃんが二十七歳のときの十一月。美奈恵ちゃんの家を誰かが訪ねてきました。どうやら男の人のようです。宅配便の方や新

聞配達の方ではないようです。だって、いつもなら窓から宅配便の車やバイクが見えるのです。今日は、車もバイクも見えません。

ドアを開けた美奈恵ちゃんと、訪ねてきた男の人の会話が聞こえてきます。

「あの、伊藤さんのお宅ですか？」

「ええ、そうですけど……」

「もしかしたら、覚えていないかもしれないけど、僕は――」

「リヨウ、君？」

「覚えていてくれたんだね！ そうだよ、僕だよ！」

わたしのところから玄関は見えないのですが、二人は今きつと抱き合い、この奇跡を喜んでいることでしょう。

「わたし、リヨウ君のことずっと待ってた……」

「遅くなってごめんね、美奈恵ちゃん」

リヨウ君は、いつか日本へ帰るためにイギリスで日本との関わりのある会社に入りました。日本支社で働けるようにまでに五年もの月日がかかってしまったのでした。そして、いざ日本に来たときリヨウ君にある不安が湧いてきました。美奈恵ちゃんが自分のことを忘れ、他の人と結婚してしまったのではという不安です。リヨウ君は美奈恵ちゃんの実家を訪れたそうです。そこで美奈恵ちゃんが都会に住んでいることと、リヨウ君は美奈恵ちゃんがまだ結婚していないことを知りました。でも美奈恵ちゃんが自分を覚えているかの不安はまだ残っていました。リヨウ君は都心へ出て、美奈恵ちゃんの家を探しました。すると、この部屋の窓からわたしの姿が見えたそう、心を決めて訪ねてきたのでした。

リヨウ君と美奈恵ちゃんは一年後、結婚をしました。真っ白なタキシード姿のリヨウ君は、あの小さかった男の子とは見違えるほどカッコよく――って、当たり前ですよ。十二年も経っているのですから。美奈恵ちゃんも今日は一段ときれいです。ウェディングドレス姿の美奈恵ちゃんは、今幸せでいっぱいなのでしょう。

二人の仲人はわたしがしたいのは山々なのですが、残念ながらわたしは声を発することができないので、仲人は別の方がなさいました。でも、わたしはずっとリョウ君と美奈恵ちゃんの間に座らせていただいていた。そして、美奈恵ちゃんの大学の卒業式以来、わたしは写真を撮ってもらいました。今までの写真と違うことは一つだけ、リョウ君も一緒に写りました。

わたしはヴェルナさんに作られ、リョウ君に出会い、美奈恵ちゃんに出会いました。わたしは今でもヴェルナさんの言葉を覚えていきます。

「わたしのかわいい子どもたち。どうかいい人の元でいい子たちと友達になってね。そして幸せや愛をその子たちに……」

ヴェルナさん、わたしはとてもいい友達と出会えました。でも、わたしは幸せや愛を与えることができたのでしょうか？ わたしはただ見守っていただけなのでは？ それに幸せや愛なら、私の方がもらったように思えます。

わたしが見てきたリョウ君と美奈恵ちゃんのストーリーは、これからもずっと続くことでしょう。

第五章 愛と幸せとベア（後書き）

ベアが見てきた物語はこれで終わりです。最後まで読んでいただいた方、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3970b/>

ベアが見てきた物語

2010年10月8日15時55分発行